
Five God Nights **～ 始まりの英雄 ～**

神崎 ゆりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Five God Nights 〈始まりの英雄〉

【Nコード】

N5629N

【作者名】

神崎 ゆりあ

【あらすじ】

最初に起こった怪事件。それは、人が人をかみ殺すというものだった。

しかし、どうも信じがたい。

何かほかの者の力が働いているのではないだろうか。

警察のいない街で起こった事件を解くために奔走する「ガーディアン」

突然現れた大きな剣を持つ男。

！。魔法や殺人、リアルと空想をこっちゃん混ぜにした新感覚ファンタジ

First chapter 1・背中にあざのある男

男は、脇のにおいをかぐ事が好きだった。好きだったというより、むしろ、やらずにはいられなくなっていた。いわば、一つの癖になつていた。男がそれを望まなくともいつのまにかその匂いで居心地を良く感じている。そんな感じだ。

考えた事はある。「どうして、そんな事をするのか。」

結局わからなかった。

何度だつて考えた。それでも、分からなかった。人に聞こうにも内容が内容だけに、それはやりたくなかった。

男にはあざがあった。背中に大きなあざ。背中の左の中央辺り。なんだかコーヒーをこぼしたような形で大きさはB5の紙一枚で覆い尽くせる程度。

男がこのあざの存在を知ったのは、友人と一緒に風呂を共にした時だった。無性に背中がかゆくなつたかと思うと友人は男の背中を指差して叫びだした。

男は見ようにも見れず、結局かゆみの引いた後、大鏡で確認した。なるほど、確かにあざのようなものがある。かゆみを伴うという事は一種の病気か。しかし、そのあと何の変化もない。

First chapter 2・目の悪い女

女は眼鏡をかけるのを嫌がった。かといって、コンタクトレンズをするわけでもなかった。ただ単に、自分が“目が悪い”という事を受け入れたくなかったのだ。

不自由な事はたくさんある。

しかし、それ以上に眼鏡をしている自分に対して嫌悪感が働く。

そんな女にも自分を好きになれる部分があった。特に好きだったのは、自分の歌声。他の誰にも聞かせた事はなかったが、いろんなところから流れてくる音楽や声、そのどれと比べても自分の声はずば抜けて素晴らしいと考えていた。

「自分の歌声を皆に届けたい。」

心の奥底では考えていたが、表に出てくる事はなかった。それが女の羞恥心故のものなのか、他の何か故なのか。女自身にも分からなかった。

Second chapter 1・善人

見違えるほど大きな口。朝起きていつものように鏡を見た。するとそこには昨日までの自分とは違う姿の自分が映っていた。

「これは僕じゃない。」

鏡の中の自分の口はその通りに口を動かす。鏡の前でいろんなポーズを決めて見る。

やはり、自分だ。

幾分か、角もあるように見える。

角だけではない。頬もこけて、肌も何か紫色を帯びている。これじゃ、まるで、怪物だ。

こんなナリじゃ外にも出られない。町歩く人を驚かし、犯罪者として見間違われるかもしれない。

今日はおとなしく部屋の中に居よう。

Second chapter 2・悪人

朝起きると布団が何者かにひきちぎられ、その破片のいくつかは部屋の隅にまで飛んでいる。

何者かの仕業なのか。ドアにはちゃんと鍵がかかっている、何物かが侵入した形跡などない。あれこれ考えているうちに、いつもと違うものが目にとまった。

自分の手。

爪が恐ろしく長くなっている。色は、緑を帯びているようにも見える。

急いで鏡を見た。

これが、自分。

これが、私。

世の中のありとあらゆるものが敵になった、そんな気分だった。

いつも通りの朝食はいらさない。これから、外に食べに行こう。そこから辺に朝食は歩いている。

Third chapter 1・最初の事件

「かみ殺された？人間が？そんな馬鹿な。」

ありとあらゆる事件を取り扱ってきたが、人がかみ殺されるなんて聞いた事がない。もちろん、犬や狼にというのなら話は分かるが、しかし、噛み後から見て犯人は、人間だと。

この街には警察という組織が存在しない。最も、これまで警察という組織を必要としなかったからである。街の人はある盟約の下ここに集まったのであるから。

『人に迷惑をかける事は一切ない。もし、かけるとしたら、それは自身が街を出る時。』

おかげで警察は無く、それに頼ることもしなかった。他とは違う、そんな街がこの街なのである。

しかし、いろんな相談事はある。道に迷ったり、野良犬を捕まえたりしたときにそれを話す相手がいなくなったらどうしようもない。

そういった理由で作られたのが、この街で警察の代わりを務める組織『ガーディアン』である。ガーディアンにはいろいろな相談が寄せられる。上記のような道案内だったり、迷子の野良犬を元の場所へ帰してあげたりと、日々そんな平和な事件を安い給料で解決している。

今回もいつも同様、警察は動かない。動くのは『ガーディアン』。特殊部隊ではないが、きちんと統率のとれた行動で、いくつかの殺

人事件を解決した事もある。もちろん、その時は警察の怒りを受けてしまったが。

「警察には頼らん。」

組織の長は口癖のように言う。今回の事件も警察の怒りを買った要因になりそうだ。

『ガーディアン』 支部は街のあらゆるところに点在するが、本部は街の中心にある。噂によれば、『ガーディアン』の方が街が出来るより前にあったとか、無かったとか。

「大体、人が人を・・・」

「目撃者は？」

こういう時、人は二つに分けられる。事実をニュースのように繰り返すものとそれを冷静に判断し、自分の行動を決めるもの。もちろん、何も考えずに紅茶飲んでるやつもいるかもしれないが。

「目撃者、居ません。なんでも、今朝の出来事だったらしく。」

「どうして、今朝だと？」

「目撃者ではないのですが、昨夜その道を通りかかった女性がその時には何もなかった事を証言しています。」

「なるほど。」

「とりあえず、現場に行ってみよう。」

『ガーディアン』の中でとりわけ重要な役割を担っているのが、レナード隊長。それからその部下数名。

レナードとその部下数名は、殺人現場へ向かうべく車に乗り込んだ。

Third chapter 2・大きな剣を持つ男

通りで殺人事件が起こる少し前の事である。一人の男が『ガーディアン』に拘束され本部まで連行されてきた。男は大きな剣を持っていた。立派な銃刀法違反である。

「どうして、こんな大きな獲物をもっているのかな？」

男は答えようとしない。それどころか、口も開かない。

「君はこの街の人間ではないよね。」

沈黙は続けられる。男に対して職務質問をしていた『ガーディアン』の男は大きいため息をついた。

「こいつを拘束しておいてくれ。」

男は小さな小部屋に案内された。優しそうな『ガーディアン』の男は小声で言った。

「すまん、これがこの街の約束事で。手荒なまねはしたくないからここでおとなしくしてくれよ。後でクッキーでも持ってくるからさ。」

素直に小部屋に入るとそこにあつた椅子に腰かけた。持っていた大きな剣は『ガーディアン』の保管庫にでも入れられてしまったようだ。

別に手足を縛られているわけでもなかったが、何もしようがないので動かなかつた。小部屋は白く塗られてあり、小さな小窓が一つ鉄格子の向こうにあつた。それ以外は外の様子を知る手掛かりとなるようなものはなく、いかにも、牢屋って感じで、客人に向けられた

作りにはなっていない。

名はロキと言った。大きな剣の話はまたいずれするとして、とりあえず今は名前だけ。

『ガーディアン』の内部がやけに騒がしくなった。かろうじて聞こえる声を一つ一つ拾って組み立てて見る。

何やら、人が殺された。と、言っているようだ。詳しい事は分からないが、ただ事ではないことは何となく予想はつく。血相変えてあわてているものの声がする。

ロキは混乱に乗じて小部屋から脱出を試みた。もちろん、部屋にかぎは掛けられており、正攻法では出られそうにもない。

「使いたくなかったけど、仕方ないか。」

懐から少量の火薬、それからライターを取り出した。更に呪術で使われる布を下に広げると、火薬をその模様に沿って広げ始めた。

「さて、と。」

ライターで火をつける。火は火薬の上を燃え広がり、一気に呪術紋章を作り上げた。パチパチという音を立てながら、布は燃えていく。紋章が完成した時、風が吹く。

「何か用？」

ロキは風の精霊シルフを召喚することに成功した。大きさはロキの半分くらい、ぼろぼろの服にぼろぼろの帽子。ふわふわと浮かんで

いる。

「あの、「ここから出して欲しいんだけど。」

「そういう事はもっと力持ちの精霊に頼んでくれない？」

「もしかして、出来ないの？」

「僕に出来ない事なんてないよ。みてて。」

シルフが指をさすと、ドアが自然と開いた。風で鍵穴を通したのだ。

「えっへん、どんなもんだい!!！」

その言葉も聞かず、紋章を足で消してその部屋を去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5629n/>

Five God Nights ~ 始まりの英雄 ~

2010年10月8日16時12分発行